

第41回日本高血圧学会 9月14~16日

医師の85%が高血圧治療に“困っている”

高血圧の診断・治療は進歩しているにもかかわらず、降圧目標達成率は極めて低い状況にある(Hypertension paradox)。「保健活動を考える自主的研究会」のメンバーで旭川医科大学内科学講座講師の中川直樹氏は「かかりつけ医に対する高血圧アンケート集計結果」を報告。「実地医家の約85%は高血圧治療に困っていることが分かった。高血圧患者には保健指導が必要で、そのためには専門医、かかりつけ医、薬剤師、保健師・栄養士、行政などの多職種連携が重要となる」と述べた。

「一生飲むのは嫌」

日本の高血圧患者は約4,300万人といわれているが、治療中でコントロール良好な患者は1,200万人(27%)のみで、それ以外〔治療中だがコントロール不十分(27%)、気付いているが未治療(14%)、気付いておら

ず未治療(32%)〕の方が圧倒的に多い(NIPPON DATA2016の試算)。中川氏らは、かかりつけ医を対象に高血圧に関するアンケートを実施。「2018年4~5月の短期間に1,129人(全都道府県)の医師から回答が得られた」と報告した。

「高血圧治療(薬物療法)を行う上で困ることはありますか?」との質問に対しては、955人(84.6%)もの医師が「ある」と回答した。具体的な内容(複数回答可)は「患者が一生飲むのは嫌という」(60.6%)、「患者が自覚症状に頼り、飲みたがらない」(50.9%)、「患者が薬に対する偏見や副作用を心配する」(44.6%)、「患者がマスコミの情報やサプリメントを信じる」(42.0%)などであった。

アドヒアランス不良が浮き彫りに

「薬物療法を開始しても、指示通りに飲んでもらうことに苦勞を感じる

ことはありますか?」との質問に対しては372人が「苦勞している」、494人が「どちらともいえない」と回答した。具体的な内容は(複数回答可)、「指示通りに飲めない、飲み忘れが多い」(60.2%)、「自己調整する」(58.9%)などで、患者のアドヒアランス不良の実態が浮き彫りになった。

医師の悩みを保健師・栄養士が軽減できる可能性

「高血圧治療を行う上で、生活習慣の是正は必要だと思いますか?」との質問に対しては、1,075人(95.2%)が「必要だと思う」と回答した。そのうち実際に生活習慣是正の指導をしている医師は997人(92.7%)で、具体的な指導内容(複数回答可)は、「減塩」(94.2%)、「体重管理」(81.0%)、「運動」(73.3%)、「禁煙」(67.2%)、「節酒」(45.9%)であった。

「減塩指導を行うに当たり苦勞していることがある」という医師は574人。具体的な苦勞は(複数回答可)、「本」(75.3%)、「減塩を実践してくれな

い」(38.8%)、「栄養士が施設にいない」(25.3%)、「指導のための時間が取れない」(19.8%)などであった。

中川氏は「今回のアンケート結果から、実地医家の約85%は高血圧診療に困っており、保健指導や栄養指導を求めていることに加え、治療中断者の抽出が重要な課題であることも分かった。解決策としては、自治体の保健師・栄養士による保健指導や国保データベース(KDB)システムの有効活用などが考えられる」と指摘した。

同氏は「実地医家の悩みを保健師・栄養士が軽減できる可能性は極めて高く、連携体制の構築が重要。そのためには各職種間の相互理解の場が必要である。保健師・栄養士には、住民・実地医家・専門医の懸け橋としての役割も期待される」と述べ、「保健師・栄養士には医師への苦手意識が少なく、その克服という課題があるかもしれないが、多職種による熱意ある保健活動がHypertension paradoxを克服し、日本の高血圧治療の進路を変えることを期待する」とまとめた。